

# 不登校の予防・対応のために

【改訂版】



高知県教育委員会事務局 人権教育課

平成 28 年 3 月

## はじめに

不登校は、児童生徒の学力や進路保障、将来の生き方に影響を与える課題であり、本県では生徒指導上の重要課題として取り組んできました。

しかしながら、平成26年度の本県の不登校児童生徒の出現率は、全国ワースト1位という結果となっています。このことは、学校が不登校の改善に向けた取組を進めているにもかかわらず、成果につながっていないという厳しい現状を表しています。特に中学校において不登校生徒の出現率が高い状況にありますが、「中学校で不登校になる子どもの半数は小学校でその傾向が出ている。」と言われており、現状を改善するためには、小学校での不登校傾向の子どもへの適切な対応や小中学校間の連携が不可欠となります。

不登校は、どの学校、どの学級、どの児童生徒にも起こり得るものであり、担任や一部の教員の対応だけでは解決できない難しさがあります。さらに、不登校が継続している児童生徒に加えて、新たに不登校になる児童生徒が増加していることから、「新規の不登校を生まない」ということを意識した未然防止の取組と予防的な取組が今後ますます重要となります。

不登校の未然防止や予防を意識した学校の取組は、児童生徒が安心できる学校づくりにつながるとともに、児童生徒を大切に作る学校づくりにもつながるものです。

この手引きでは、不登校を予防するための基本的なことを中心に紹介しています。各学校におかれましては、この手引きに掲載していることを基盤とした取組を組織的に推進し、よりよい学校づくりに生かしていただければ幸いです。

一人一人の児童生徒が安心して通うことができ、自尊感情や自己効力感を育むことができるような学校づくりが進むことを願っています。

平成28年2月29日

高知県教育委員会人権教育課長 大西雅人

# も く じ

- 1 予防的観点から理解しておきたいこと・・・・・・・・・・ p 1
- 2 適切な働きかけやかかわりのために大切なこと・・ p 2
  - (1) 子どもからのサインを見逃さないために・・・・・・・・ p 2
  - (2) 欠席・遅刻の連絡時における対応・・・・・・・・ p 3
  - (3) 家庭訪問の際の留意点・・・・・・・・・・・・・・・・ p 4
- 3 学校復帰までのプロセスイメージ・・・・・・・・・・ p 5
- 4 明日に向かって・・・・・・・・・・・・・・・・ p 7



## 1 予防的観点から理解しておきたいこと

高知県における不登校の状況は、文部科学省の平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、不登校出現率は全国ワースト 1 位となり、依然として喫緊の課題となっています。また、不登校につながる長期欠席者数も多く、非常に厳しい状況が続いています。

不登校の理由には様々なものがありますが、教職員が理由として考えているものと、子どもが理由として挙げているものにはギャップがあることを確認することができます。ここでは、中学生と中学校教職員を比較した資料を紹介します。まず教職員、生徒ともに「友人関係をめぐる問題」を理由の一番目に挙げています。しかし、二番目に教職員は「親子関係をめぐる問題」を、生徒は「学業の不振」を挙げ、三番目に教職員は「学業の不振」を、生徒は「教職員との関係をめぐる問題」を挙げています。

調査は実施した時期に大きな差がありますが、一つの傾向として見た時、教職員は生徒自身や家庭の問題を不登校の理由としてとらえている傾向にある一方、生徒は友達や教職員との関係性をその理由として挙げており、双方で「ズレ」が生じています(表参照)。

このことから学校は、不登校予防や不登校の子どもに対するかかわりや支援において、学校側の一方的な考えによる対応ではなく、子どもの視点から考え対応することが必要だといえます。子どもの視点から考え対応するためには、日ごろの観察とともに個人面談や生活アンケートや Q-U 等の活用等が効果的です。そしてその情報を持ち寄り、教職員が情報共有をするとともに、多様な視点から具体的な対応策を考え、役割を明確にして対応することが求められます。

また、日頃から「子どもと教職員との信頼関係」「子ども同士の人間関係」の構築に留意するとともに、学級経営を工夫し、安心できる環境をつくることが求められます。安心できる環境づくりを進めるうえで、「いけないことはいけない」と毅然とした態度で叱ることも大切ですが、子どもの良さを見つけ、望ましい行為に対しては肯定的な評価を返すことの大切さも忘れてはなりません。

項目	生徒の回答(複数回答)		教師の回答(複数回答)	
	%	順位	%	順位
友人関係をめぐる問題	52.9	①	29.0	①
学業の不振	31.6	②	11.4	③
教職員との関係をめぐる問題	26.2	③	3.7	⑥
部活動	22.8	④	5.5	⑤
入学・転校・進級でなじめない	17.0	⑤	3.6	⑦
病気	14.7	⑥	8.6	④
親子関係をめぐる問題	14.2	⑦	14.2	②

表：中学生と教師の「不登校のきっかけ」に関する意識の差異  
 ※生徒の回答については、平成 26 年 7 月の「不登校に関する実態調査」(平成 18 年度不登校生徒追跡調査報告書)に、教師の回答については、平成 26 年度の「不登校となったきっかけと考えられる状況(高知県公立中学校)」(平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」)に基づくが、共通する項目で比較している。

## 2 適切な働きかけやかかわりのために大切なこと

### (1) 子どもからのサインを見逃さないために

悩み事を持っている子どもは、日常の生活の中で様々なサインを発信しています。教職員がそれに気づくことができるかできないかは、一人ひとりの観察力によるところが大きいです。気づきを一元化し、互いに共有できるシステムを構築することによって、多様な角度から子どもの発するサインを早期につかみ、対応することが可能になります。そのためにも学校の組織力を高めることが肝要です。

悩み事を持っている子どもは、以下のようなサインを出す傾向があるので、このようなサインが感じられたときは、教職員で情報を共有しながら見立てを行い、具体的な対応につなげることが大切です。

#### 〈子どもが発するサイン〉

##### 【学校で見られがちなサイン】

- @理由のはっきりしない欠席や、「風邪」「頭痛」「腹痛」等の症状で長引いたり、断続化したりする。
- @身体の不調を訴えて保健室に行く機会が増える。
- @遅刻や早退が多くなる。
- @自己否定的な言葉やイメージを持つようになる。
- @休日の翌日や特定の教科や試験がある日の欠席が多くなる。
- @部活動や委員会活動を休みがちになったり、やめたがったりする。
- @友達とのかかわりが少なくなり、クラスの輪から離れがちになる。
- @学習への取組の様子が変わり、意欲の減退や成績の低下が見られる。
- @忘れ物が多くなる。
- @ぼんやりすることが多くなる。



##### 【家庭でのサイン】

- @前の晩には学校に行く準備をするが、翌朝になると起きてこない。
- @朝になると腹痛等の症状を訴えるが、欠席をすると症状が無くなる。
- @学校に行こうとする時、体が硬直して動かなくなることがある。
- @食欲がなく顔色が悪い。
- @夜遅くまで起きていて、なかなか寝つけず、眠りも浅い。
- @家族と会話することを避けがちになり、部屋にこもる時間が長くなる。
- @理由もなくイライラしたり、周りの人や物に八つ当たりしたりするようになる。



## (2) 欠席・遅刻の連絡時における対応

子どもの欠席・遅刻が長引いた時点で対応する対症療法的なかかわり方では、時間がかかるだけでなく子どもや保護者の負担も大きくなる可能性があります。子どもが欠席したその時から、学校としてどのような対応をするのかを教職員が共通に理解し、適切な対応を行うことが不登校の未然防止につながります。

欠席・遅刻の対応においては、1日めからどのような対応をするのかなど、段階を追った対応を確認しておく必要があります。以下を参考に各学校における対応を充実させてください。

段 階	学校の対応
1日め	<p>【連絡あり】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇欠席の理由と熱があるかどうか等をきちんと把握し、病院へ行くことをすすめる。遅刻してくるのであれば、何時くらいに登校できそうか確認する。</li> <li>◇欠席の場合は、次の日の日程や持ち物等の連絡を行い、子どもが安心して通学できるように配慮する。</li> <li>◇子どもの様子を教えてもらうとともに、「病気が理由である場合」は、回復に向けて通院を働きかける。</li> </ul> <p>【連絡なし】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇必ずその日のうちに連絡を取り、様子を確認する。</li> </ul>
2日め	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇子どもの様子を聞くとともに、保護者の様子から「行き渋り」の兆候がないか推察する。</li> <li>◇欠席の理由があいまいな場合は、家庭訪問を行う。</li> </ul>
3日め	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇理由がはっきりしていても、家庭訪問を行いたい旨を伝え、子どもや保護者に安心感を与えたい。</li> <li>◇欠席が続くことで不安や学校へ来にくくならないよう配慮する。</li> <li>◇校内支援委員会等で支援について検討することも考えたい。</li> </ul>
1ヶ月の 累積が 3日以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇不登校の予兆ととらえ、校内支援委員会を中心として、チームでの対応が行えるよう、各自の役割を明確化して対応できるように体制を整えておく。(支援会で使う資料の準備等)</li> <li>◇子どもや保護者の心情を理解しようとするかかわりと、信頼を大切にする。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇欠席・遅刻の連絡がない場合は、家庭や保護者に連絡をしたり、在校生に兄弟姉妹がいれば、様子を聞いたりして状況を把握する。</li> </ul>



### (3) 家庭訪問の際の留意点


不登校が継続する子どもに指導・援助をすすめるうえで、登校を促す働きかけやチームでのかかわりだけではなく、家庭への訪問等により信頼される関係を築くとともに、学習や進路支援を行うことが必要です。

家庭訪問では「してはいけないこと」があります。例えば教員が子どもを学校に復帰させたいと思って家庭訪問を繰り返したとしても、その訪問の仕方や訪問における子どもとのかかわり方が誤っていたら効果は表れないばかりか、不登校の状況はますます悪化させかねません。

それだけに、家庭訪問をする際には、下記のことについて留意し、効果的なかかわりができるようにしたいものです。

【家庭訪問の際にしてはいけないこと】

- 連絡をせず、突然訪問する。
- 不登校の原因を問い詰める。
- 明日は登校しようと促す。
- 登校できていないことを責められていると感じさせるような言動をする。(例：「休み癖がついてしまうよ」「勉強が遅れるよ」など)



【家庭訪問の際に留意したいこと】

- 事前に連絡を入れたり、定期的な訪問を継続する。
- 教師という立場を意識し過ぎることなく子どもとの関係をつくる。
- 保護者の不安や否定感を理解し、それを軽減できるような対応や会話を行う。
- 子どもや保護者の気持ちを想像しながら話したり、聴いたりする。
- 子どもと一緒に活動(運動やゲームなど)をしたり、子どもと一緒に時間を過したりする中で、子どもの世界への理解につなげられるようにする。
- 学校行事や学級生活の様子を伝え、学校や学級の一員であることを意識できるように働きかける。
- 学級の活動が家庭でできる内容であれば、取り組んでもらう。作品を作成した場合は、本人の理解を得たうえで、学級で紹介したり、友達の感想をフィードバックしたりし、本人と学級をつなぐ。

短い時間でも  
定期的に継続して家庭訪問をする

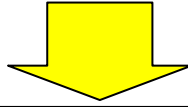


### 3 学校復帰までのプロセスイメージ

#### (1) 背景を理解する（見立てる）

子どもが学校への登校を拒む背景は何？

学校に「行くことができていない」子どもがいる場合に考えたいこと



#### 〈理由が分からないときに考えたいこと〉

- ◇学級の友だちや教職員とうまくコミュニケーションができないから？
- ◇いじめの問題や低学力の問題があるから？
- ◇授業について行けず、退屈さを感じているから？
- ◇何らかの発達障害の可能性、あるいはその傾向があるから？
- ◇学校に対する不信感や期待感を保護者、子どもが持っているから？
- ◇本人が遊びや学校外の世界への強い興味・関心をもっている？学校へ通う価値を感じていないから？
- ◇親子関係や家族における葛藤や心労があるから？
- ◇家庭の養育上の課題（虐待・DVなど）があるから？

心の専門家であるスクールカウンセラーにつなげ、見立ててもらおう。

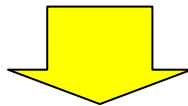
#### (2) 当該の子どもへの支援の検討

学校でやらなければならないことは何か？

校内支援体制を確立しスタッフ会議を行う。

→子どもの現状について共通認識をはかる。

スタッフ：管理職・主幹教諭・指導教諭・教務主任・生徒指導主事・教育相談担当・  
人権教育主任・特別支援コーディネーター・養護教諭・学年主任・担任・  
スクールカウンセラーなど

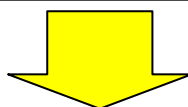


Q-U等を実施していれば、  
その結果も参考にする。

「生活・健康面」「心理・社会面」「学習面」「進路面」から現状を確認する。

#### 〈スタッフで確認したいこと〉

- ◇学校や家庭における生活状況や心身の健康状況
- ◇学習状況や学力、授業中の姿勢
- ◇情緒面・ストレス対処のスタイル・人間関係等の状況、必要に応じて心理検査等の結果
- ◇得意なことや趣味、進路希望、将来の夢など

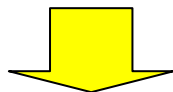


当該の子ども現状を確認、共有したことをもとに、どのような支援を行う必要があるのかについて検討する。



(3) 具体的な支援に向けて  
役割分担の明確化

校内支援体制を確立しているスタッフを中心としたチームで、当該の子どもにどのような支援を誰が行うのか、またその支援の場はいつどこになるのか等について確認をし、期間を決めて支援を行い、その状況についてフィードバックをする。

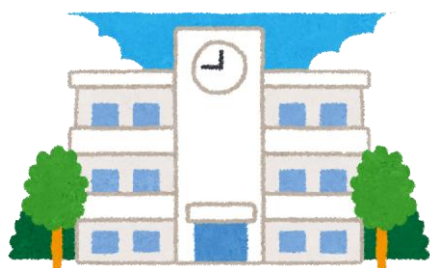
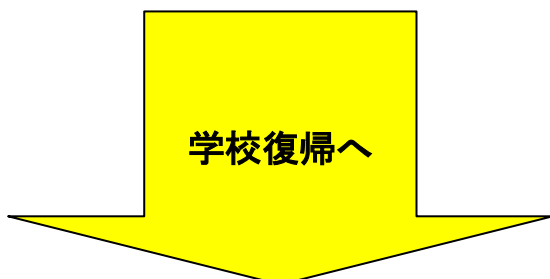


担任だけではなく、校内支援委員会を構成するスタッフを中心に役割分担を行い、チームで支援を行う。

- ◇SC・SSW等の専門家のアドバイスを受けながら進める。
- ◇家庭訪問を行う際に留意すべきことを確認しておく。(「いつ行くのか、何を話すのか」など)
- ◇保護者の言動の背景を考え、保護者とともに考えるスタンスを大切にする。
- ◇「子どもの状態は変化する」を前提に、常に見立てと仮説の修正に留意する。
- ◇子どもとの約束を守り、我慢する姿勢を大切にする。(「子どもが約束したことができて、さらなる要求をするのは控える」など)

※留意すべきことを、常に確認して進める必要がある。

学校復帰へ



状況によっては、関係機関へつなぐこと、特別支援学級等への通級の検討、医療機関の紹介、PTAや民生児童委員への協力要請、児童虐待の可能性があれば市町村担当課や児童相談所等への相談などもあり得る。



注：学校復帰は最終目標ではなく、通過点であり、復帰後の関わりが重要となることを忘れてはならない。

#### 4 明日に向かって

長欠、不登校の問題を解消していくためには、一人ひとりの子どもが「学校が楽しい」「学校に来たい」と思うことができるような学校づくりや学級づくりが必要であり、「できた」「わかった」を実感できる授業づくりが求められます。

生徒指導提要(文部科学省)では、「学校教育をより一層充実させるための取組を展開すること」の大切さが示され、「『不登校の児童生徒にとって居心地のいい学校』は『すべての児童生徒にとっても居心地のいい学校』になる」と述べています。そしてそのような視点を持って「すべての児童生徒が楽しく通えるような学校教育が目指されるべき」とも述べています。そのためには、授業が「わかる」「楽しい」ものであること、ひとりひとりが大切にされ、「自分のよさが発揮できる」、「仲間と共に成長できる」学級、学校であることが大切です。居心地のよい学校であれば、子どもは学校に魅力を感じ「明日も来たい」と思うことでしょう。そんな学校は、保護者も魅力を感じることができるだけでなく、そこで働く教職員にとっても働きがいのある職場となるでしょう。

長欠、不登校の子どもと向き合っている保護者は、日々の生活において悩むだけでなく、将来への不安も感じています。そのような保護者とつながり適切な支援を行うことは、保護者だけではなく子どものしんどさを軽減することにもつながります。

そのためにも、教職員一人ひとりが、保護者や子どもの目線で学校を見つめつつ、より良い学校づくりを目指すとともに、保護者との良好な関係を築くことにより、長欠、不登校の問題を始めとする、様々な問題が解消できることを期待しています。



※不登校を生じさせない未然防止の取組を授業を中心として、すべての教育活動で、組織的な取り組む開発的な生徒指導を推進していただきたいと思います。開発的な生徒指導については、『生徒指導ハンドブック(高知県教育委員会 平成26年)』に具体的に載せています。校内研修等にご活用ください。

参考文献：「あの子のために何ができるかなあ？」 名古屋市子ども適応相談センター  
「チーム援助で子どもとのかかわりが変わる」 石隈利紀・山口豊一・田村節子  
「生徒指導提要」第6章 第12節 文部科学省